

# 月が欲しいと泣く 子供

～GAME～

作：あぷろ



## GAME

またか。

かすかにかぎとれた機械油の匂いに木村は顔をしかめた。

ごくろうさまです、と挨拶する制服警官に軽く手を挙げるだけで応えながら、被害者の身体を覆っている布をめくり、中を確認する。

バラバラにされた身体。

やっぱり……。

だが、内蔵の代わりに飛び出た機械の部品と擬似血液が混ざり合った姿に木村は頭が痛くなった。

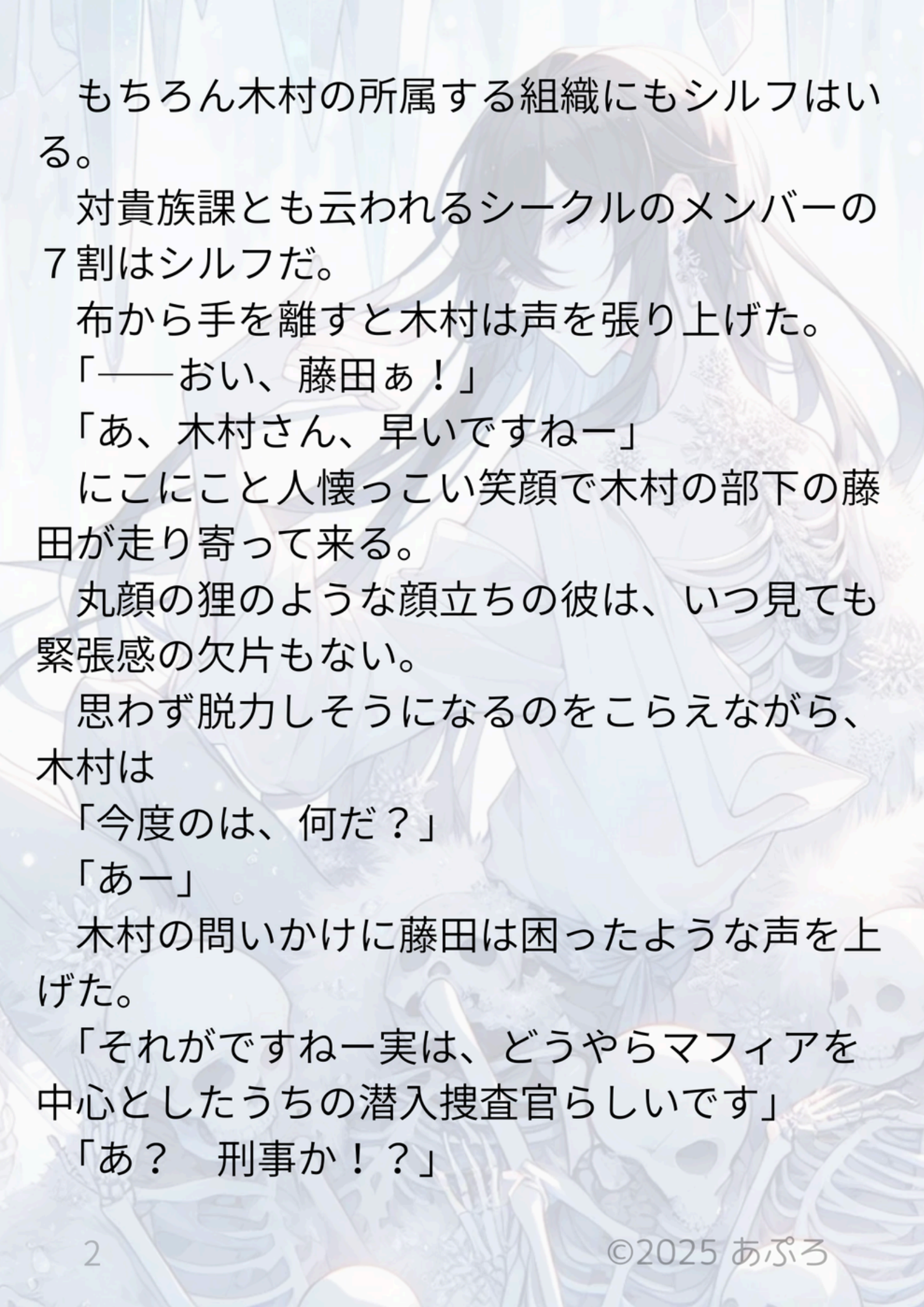
これで何体目だ？

今月に入ってから何故か機械人間がバラバラにされるという事件が多発していた。

しかも被害者は必ずシルフ。

もともと軍用に開発された彼らは戦闘能力も高く、見目も良かった為、政治家をはじめ命を狙われる可能性のある金持ち連中の警護等にも広く利用されるようにもなった。





もちろん木村の所属する組織にもシルフはいる。

対貴族課とも云われるシークルのメンバーの7割はシルフだ。

布から手を離すと木村は声を張り上げた。

「——おい、藤田あ！」

「あ、木村さん、早いですねー」

にこにこと人懐っこい笑顔で木村の部下の藤田が走り寄って来る。

丸顔の狸のような顔立ちの彼は、いつ見ても緊張感の欠片もない。

思わず脱力しそうになるのをこらえながら、木村は

「今度のは、何だ？」

「あー」

木村の問いかけに藤田は困ったような声を上げた。

「それがですねー実は、どうやらマフィアを中心としたうちの潜入捜査官らしいです」

「あ？ 刑事か！？」



「そのようです」

だんだんわけがわからなくなってくる  
な……。

最初、破壊されたのがある人物、政治家のボディーガードだったため、その政治家に恨みの  
あるもの、政敵、テロリスト……などを調べて  
きたのだ。

そして次は金持ち連中の所のボディーガード  
やらペット。

その都度、捜査の枠を広げたり狭めたりして  
きて、今度は刑事。

「マフィア連中じゃないのか。潜入がバレて  
とか……」

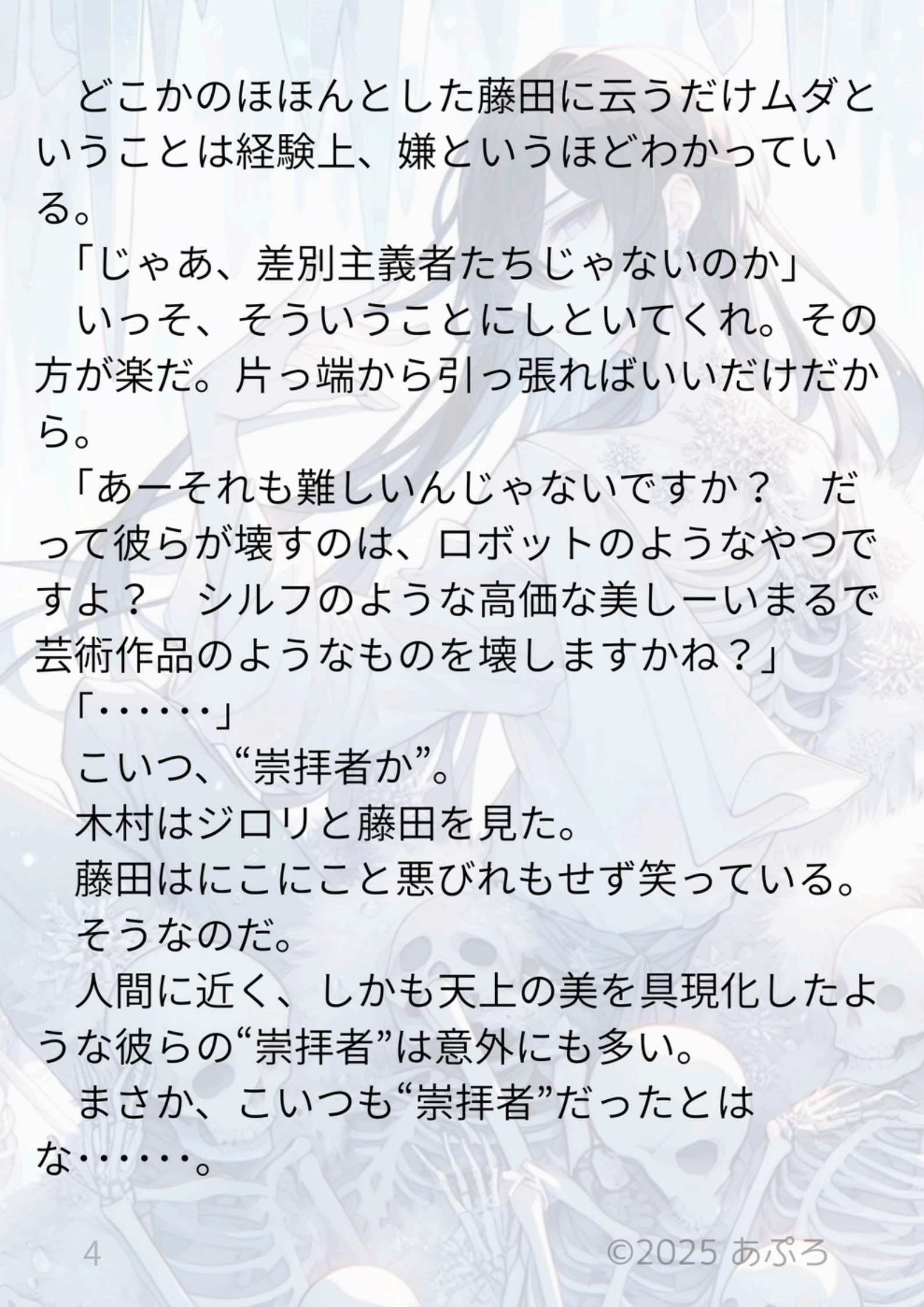
せめてこれ以上、ややこしくならないでくれ  
という希望も含めて、木村が呟く。

「あー……それはないんじゃないですか。  
だって手口が同じですもん」

わかってんだよ、そんなことは！？

そう怒鳴りたいのをぐっところえる。





どこかのほほんとした藤田に云うだけムダということを経験上、嫌というほどわかっている。

「じゃあ、差別主義者たちじゃないのか」

いっそ、そういうことにしといてくれ。その方が楽だ。片っ端から引っ張ればいいだけだから。

「あーそれも難しいんじゃないですか？　だって彼らが壊すのは、ロボットのようなやつですよ？　シルフのような高価な美しいいまるで芸術作品のようなものを壊しますかね？」

「……」

こいつ、“崇拜者か”。

木村はジロリと藤田を見た。

藤田はにこにここと悪びれもせず笑っている。

そうなのだ。

人間に近く、しかも天上の美を具現化したような彼らの“崇拜者”は意外にも多い。

まさか、こいつも“崇拜者”だったとはな……。



先が思いやられる。

すっかり何か云う気力を失くした木村は、にこにこ笑うどこか間の抜けた藤田の顔に思いっきり重くなった息を吐いた。